追悼文

後藤重巳先生との思い出

佐藤正博
（史学科四期生）

「佐藤君一寸来てみてくれ」先生の喜寿のお祝いに招かれ、先生の研究室を訪れた私にいつものように淡々と声をかけ博物館展示室の前に導きドアをさっと開かれた。その中には、ご自身の収集された膨大な近世資料がずらりと展示されていた。この時ほど感動を覚えた時は無い。

当時の学生は後藤先生のことをどう見ていたのだろうか。日本史研究室の研究誌である一九六九年一月発刊された『國史纂集』創刊号（以下、創刊号とする）にあるT子さんの言葉を借りれば「その時の研究室の雰囲気は何かしら近寄りがたく」「とてつもなくおっかない先生という印象をうけ」たそうである。一方、二年先輩のMさんは先生と年が近いため先生が出された近世文書を手にしながら「僕はこれをこう読む。後藤先生はどう読むだろうね。」とライバル意識をも燃やしていた。

一九六八年末、考古学専攻で同期生のT君が上代博物館の再建の烽火を上げたが、単発的な状況にあった。その間に二人で博物館の再建、図書室への不満など心の内を打ち明け会い、私は創刊号に「別府大学博物館設置の現状と博物館講座」を掲載した。

この小文に対する史学科教師陣の反応は素早かった。創刊号が発刊される前に「博物館及びカリキュラムに関し史学科教師陣と話し合いがなされ」仮博物館の設置、カリキュラムの一部改正が口頭で述べられた。その上、私の主宰する歴史研究部の機関誌『歴史の海』と部活動への批判、T君が主宰していた『ちかたび』への批判が後輩E君の名で創刊号に掲載された。

今、創刊号を読み直してみると史学科教師陣と学生とが本音でぶつかりあったことが昨日のことのように思い出されてならない。稚拙な当時の文章を振り返ってみると弁明がましいが、組織を動かし組織を作っていく上で当時、学生として真剣に考え、作り上げた結果だと認めていただきたい。

さて、一九六九年四月新学期が始まり桜舞い散るグラウンドから校舎に向かう階段でT君と出会い、私の方から「僕たちは捨て石になっても良い。後輩や大学のため大学改革をやろう」と呼びかけるとT君も同調し、西洋史のH君、東洋史のM君にも働きかけることにした。

数日後、T君の下宿で組織の原案を作成した。組織名は史学科四期生と四学年と四研究室をかけて史四共闘会議。スタンスはノンセクトラジカル。旗は破壊ではなく創造を表す緑色。改革内容は、

一、博物館の設置　考古のみでなく文書や民族具なども扱う館

二、図書館の設置と蔵書の確保

三、学生定員数を守ること

とした。その後、西洋史のH君の発案でゼミの開講、拡大委員会でM君の発案により就職斡旋の平等性が追加された。

この交渉は、卒業一か月前まで決着がつかず四人はそれぞれの立場で卒業式ボイコットを決定し、社会へ出ていった。

このような教師陣との激しい確執があったが、後藤先生が開いて下さった扉の向こうを見た途端、先生は僕たちを捨て石にせず基礎にして下さったんだと深い感激を覚えた。

ある時は、学生募集に全国を駆け回り、又、ある時は、病魔と闘いながらハワイで講義をされ、別府大学の大黒子として獅子奮迅の活躍をされた先生の姿は、我々教え子の目にしっかりと焼き付いてる。先生の生き様は私達の目標である。私たちはいつか先生に追いつき、できれば超えたいと密かに思っている。

また、お会いする時は、ゆっくりと昔話をしながら談笑しましょう。後藤先生の御霊が安らかでありますよう祈念申し上げ擱筆いたします。